

追悼

名誉会員
小高民夫先生のご逝去を悼む

小笠原憲四郎



日本古生物学会名誉会員の小高民夫先生（東北大学名誉教授、日本地質学会名誉会員）は、東日本大震災から1カ月後の平成23年4月12日、大動脈瘤破裂で逝去されました。享年86歳でした。慎んでご冥福をお祈り致します。

小高先生は東京生まれの横浜育ちで、旧制高校は水戸で過ごされました。東北大学理学部地質学古生物学教室入学直後、結核の診断をうけて、1年留年し、これが後に誤診であったことを伺いました。同期の入学者は金谷太郎・桑野幸夫・須鎗和巳・福田理・松野久也氏などですが、留年した結果、昭和24年卒業となり、同窓生には鎌田泰彦・橘彰一・松尾秀邦先生などがおられます。先生はご卒業後、教室の副手を務められ、1951年に東北大学理学部地質学古生物学教室の助手となりました。1959年に半沢正四郎教授の下で、エゾキリガイダマシ科（*Turritellidae*）の系統分類学で理学博士の学位を取得されました。学位取得して後の1962年にニュージーランド・ウェリントン大学講師として招聘され、3年間古生物学の教鞭をとられています。1964年に母校の東北大学に戻られ助教授、1973年には畑井小虎教授の後任地史学講座の教授に就任されています。先生が教授就任頃の教室は、地史学講座に村田正文・野田浩司、地質学講座に岩井淳一、北村信、中川久夫、柴田豊吉、古生物学講

座には浅野清、高柳洋吉、高山俊昭、酒井豊三郎氏などがスタッフでした。その後、岩井教授・浅野教授の御退官や人の移動があって、1977の小高講座は森啓助教授、田沢純一・小笠原憲四郎助手の体制で、高柳・北村両教授の講座も新たなスタッフが揃い、これらの陣容で10年以上研究教育に携わりました。

小高先生の最初の論文は畑井小虎先生と共著の「*Turritella* from the Shimokita Peninsula: 地質学雑誌56巻p. 101-104」で、続いてPaleogeneの*Turritella* (1950)、新種*Turritella*の記載(1951)と日本産の現生*Turritella*に関する研究(1951)、*Turritella*による秋田県鮮新統の分帯(1954)など東北地方の新生界から産する*Turritella*化石研究を中心に次々に研究成果を発表されています。1959年には理学博士の論文であるThe Cenozoic *Turritellidae* of Japanを東北大学理科報告から出版しました。この論文は*Turritella*の系統分類を構築しただけでなく、貝類分類系統学と新生代貝類学に新たな指針をあたえた金字塔と言えるものです。また小高先生は1953年に日本古生物学会誌に*Anadara granosa*の形態変異について報告し、その貝殻成長に伴う形の変異が棄却楕円で現わされることなどで国際的な研究評価を受けておりましたが、さらに1956年には「地質学と推計学」を発表され、古生物学に生物統計学の手法の導入を推進しています。コンピューターが普及し始めた1970年代頃から生物統計学や解析学などに関心を払われ、特に東北大学学内での計算機センターの設立に尽力され、因子解析など群集解析をいち早く進められました。

小高先生は地域地質研究や貝類化石群の研究もなされ、中新統最下部の特異的な青森県の磯松層の貝類化石群(1955)や中部中新統の山形県銀山層(1961)、南津軽(1967)をはじめ東北地方の貝類化石の記載報告をされています。

先生は1973年の教授就任時以来、貝殻を用いた酸素同位体に基づく古水温測推定を導入し、その後本格的にこれらの実験に取組まれました。私は小高講座の助手として採用された1976年11月以降数年間、先生の下で大桑層の*Turritella saishuensis*を用いた貝殻の酸素同位体の研究を行いました。この小高研究室の新たな取組は、貝殻の続成作用による変質のためか、思った成果が得られませんでした。その後、1980年には*Turritella*の性的二型現象1986年には、国内の貝類研究者はもちろん、長年研究交流のあったロシアのYuri Gladenkov、韓国のYun Sun、USGSのLouie Merincovich Jrなども参加して「Origin and migration route of Japanese Cenozoic Mollusca」を日本古生物学会特別号として英文出版し、世界中から高い評価を受けました。小高先生はこの論文集のなかで、これまでの*Turritella*研究の集大成を成し遂げておられます。

小高先生はShallow Tethys International Symposiumの



小高先生と Kennett 夫妻.

国際組織委員会委員として最初のイタリー・パドバの会議から参加され、第2回のオーストラリア、第3回のオーストリアなどを訪問され研究成果を発表されてきました。そして1987年には仙台で第4回会議を主催し、齋藤報恩会から特別号のProceedingsも刊行されています。

小高先生の御退官の際には、ニュージーランドのGrant-Mackie先生のご協力も得ながら29編の600頁を超える大著の記念論文集（Saito Ho-on Kai, Spec. Pub., no. 2）が刊行されています。小高先生は、これまでに *Turritella* 化石に関する研究や新生界地域層序に関する研究で、85編

の論文と「大型化石研究マニュアル」などの4編の単行本を出版されています。

小高先生が東北大学在籍中は大学入試センターの試験問題委員を担当され、地学分野の部長も務められました。また東北大学評議員として1983年から2年間大学運営に尽力されました。特に東北大学博物館の設立に尽され、現在の東北大学総合学術博物館に繋がる礎を築かれました。さらに1982年以来、宮城県や仙台市の文化財審議委員を務められていました。東北大学退官後は、東北学院大学教授として10年以上学生の教育と研究指導を担当されました。

1998平成12年には長年の教育研究の功績で「勲4等瑞宝章」を叙勲されています。

小高先生がニュージーランド滞在時の学生であったAlan Beu氏（現NZ地質調査所）やJim Kennett氏（現UC, Santa Barbara）（写真）に当時の先生の授業等の事を伺うと、大変印象的な講義であったようで、特に小高先生指導の地質巡検でのフィールド調査は大変楽しいかった思い出が残っているとの事です。

仙台の伝統でもある地質学に土台を置いた古生物学と、世界をまたにかけた地質学・古生物学の発展に貢献されてきた小高民夫先生でした。長年の御貢献に敬意を表しつつ、ご冥福を祈念する次第です

ご遺族は、奥様の順子様、ご長男の健一氏と次男の正人さんで、奥様の自宅は、仙台市太白区桜木町18-18です。

